校長室より

「能登半島地震の被災地ボランティアを通して」

２４０４１５

今日の全校集会では、任命式と表彰式のあとに、野村先生からお話をしてもらいました。野村先生は、この春休み期間中に休みをとって、能登半島地震の被災地に自ら出掛け、石川県羽咋郡志賀（しか）町でボランティアとして活動してこられました。「やってみよう！」という気持ちはもつことはあっても、実際に行くとなるとなかなか一歩を踏み出せないものです。本当に尊い行動だと思います。震災の現場で見たこと、感じたことを直接お聞きしましたが、実体験をされたからこその内容を聞くことができました。

＜野村先生からのお話の内容（一部抜粋）＞

- 道路が修繕されたことでボランティアの活動も始まったが、でこぼこが至る所にあり、４０～５０ｋｍで走れる道を２０～３０ｋｍでしか走れない状態であった。
- 潰れた家の屋根が、あるはずのない自分の目線の高さにあった。潰れた家の中には、大切な人や大事なものがあり、この中なら助け出したり、探し出したりしたのだと思うと怖いと思った。
- ボランティアとして、料理屋さんを営んでいた家の片付けをやらせてもらった。その中に、兵庫県立舞子高校の生徒さんたちがいて、一緒に活動をした。
- 高校生たちの活動の様子に感動した。与えられた役割を「はい！」という爽やかな返事と共に、無駄ごと一つ話をすることなく、てきぱきと活動する姿があった。
- 休憩時間には、率先して隣の家に行って、お手伝いすることはないかと動いていた。
- その子たちに直接話を聞いてみたかったが、本当に一生懸命に働いていて声も掛けられないような真剣さだった。
- 一日の活動を終えたときには、その料理屋の方から握手を求められ、涙を流して感謝されていた。
- その高校生の姿を見て、中学生にもできることはあるんだろうなと思った。
- 幸中には「守られる人から守る人へ」という言葉がある。心も体もたくましく育っているからこそ、地域へ自分たちができることで貢献するということを考えることができるんじゃないかと思った。
- 被災地の支援という大きなことでなくても、日々の生活の中で行動できることを見つけて、動いていくことを大切にしたい。

野村先生、貴重なお話を聞かせてくださり、ありがとうございました。自ら動き出すことの大切さ、相手のために本気で取り組むことの大切さを改めて感じました。